

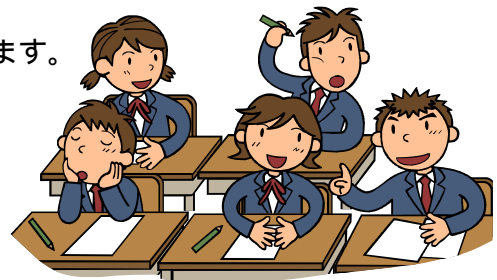
Q13 スクールカウンセラーとの連携のポイントは何か。

スクールカウンセラーには、2つの大きな特徴があるといわれています。一つは、「専門性」、もう一つは「外部性」です。「専門性」とは、児童生徒の臨床心理、すなわち「心の状態」について、専門的な見地から助言ができる点です。また、「外部性」とは、スクールカウンセラーが学校の教職員とは異なる「外部の者」であるという点です。これらの2点を踏まえ、教育相談のよきパートナーとしてスクールカウンセラーを活用し、学校の教育相談体制を機能させることが大切です。不登校児童生徒への支援の在り方や、実際の対応をすべて任せることではありません。以下に、連携のポイントを示します。

1 スクールカウンセラーの役割を明確に

スクールカウンセラーは、大きく次の職務を担っています。

- (1) 児童生徒及び保護者へのカウンセリング
- (2) 学校の教職員の教育相談に関する助言・援助
- (3) 教育相談委員会やケース会議への出席とコンサルテーション（助言）
- (4) 教育相談に関する講演会や研修会等の実施
- (5) 校区の小学校における緊急的な教育相談に関する対応



ともすると、(1)や(2)のみをスクールカウンセラーの役割であると誤解しがちですが、これらと同等以上にスクールカウンセラーが力を発揮するのが(3)です。すなわち、担任や養護教諭、教育相談主任、教育相談員等と共に児童生徒が抱える問題の見立てを行い、指導の方針と一緒に考えることができる存在であり、そのことを通して教職員が教育相談の資質や能力を高めることこそが、スクールカウンセラーに最も期待される役割であることを忘れてはなりません。

2 教育相談主任のきめ細かい調整が不可欠

スクールカウンセラーが勤務する曜日や時間は決まっています。したがって、その限られた時間で最大限の効果を出すためには、勤務内容に関する調整が不可欠です。その役割を担うのが教育相談主任です。担任は授業に行ったり、部活動の指導をしたりすることで手一杯になりがちです。そこで、スクールカウンセラーの勤務日には、次のようなことに留意します。

- (1) 当日の勤務内容に関する打ち合わせと児童生徒に関する情報の提供
- (2) カウンセリングや相談の内容に関する情報の整理と今後の支援方策の検討
- (3) 勤務実績簿や勤務記録（事務職員と連携）・援助記録の整理（援助にかかわった教職員と連携）
- (4) 担任・管理職などへの情報の提供
- (5) 次回の勤務日までの教育相談に関する確認と、次回の勤務内容についての確認

教育相談主任はこのように、スクールカウンセラーの限られた勤務をできるだけ有効にするために、人や情報をつなぐ役割を果たすことが大切です。教育相談主任がスクールカウンセラー宛に書いた一枚のメモが有効に働く場合もあります。

3 教職員が気軽に相談できる場のひと工夫

担任とスクールカウンセラーは、お互いの働きや力を補い合う存在です。

児童生徒の様子がおかしいと感じたとき、互いにちょっと声をかけたり、情報交流したりすることで、迅速で的確な対応ができ、不登校の未然防止にも役立ちます。普段からの対話が大事です。また、学年会や各種の委員会にオブザーバーとして参加してもらうことも信頼関係づくりに効果的です。

そのほかにも、次のような工夫が大切です。

- (1)勤務日の活動（どこで何をしているか）についての全教職員への周知
- (2)校長や教頭との意見交流の機会の確保
- (3)学年会などへのオブザーバーとしての参加
- (4)各先生との懇談機会の確保（15分程度でもよい）
- (5)スクールカウンセラーと共有した情報についての担任との連携

日常の何気ない言葉かけや対話が、大きな信頼関係を築きます。そして、スクールカウンセラーとの触れ合いを通して、教職員が児童生徒へのかかわり方等について改めて考えること自体が、最も教職員が力を付ける日常的な研修となるのです。

4 スクールカウンセラーの持ち味を生かすコーディネートも必要

女性か男性か、年配か若いかなど、活発な感じか落ち着いているか、今までにどのような経験をもっているか、子育ての経験があるかなど、個性や持ち味を熟知していると、児童生徒や保護者につなぐとき役立つことが多いものです。カウンセリングにも相性があります。反発したり嫌がったりしてどうしても相性が悪いような場合には無理をしないことです。その場合は直接のカウンセリングではなく、コンサルテーションに切り替えるなどの工夫をすることも必要です。

5 丸投げしない、抱え込まない、・・・共に育てる意識を大切に

専門家が身近にいと、頼りすぎてすべてを任せてしまいたくなることがあります。逆に、責任感やプライド等から、自分が担任する児童生徒の問題について、「私の責任でやります」と自分だけで抱え込んでしまうことも起こり得ます。このどちらも、児童生徒のためにはなりません。

教育相談のよきパートナーとして共に児童生徒に向き合い、育てていこうという姿勢こそが、多面的に児童生徒の心を見つめることにつながり、より適切な対応を可能にしていけます。スクールカウンセラーから専門的な助言を得ながら、校長の判断のもと、学校として取り組んでいくことが最も大切です。